St. Luke's International University Repository

胃ろう造設ー家族にガイドライン必要ー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野田, 有美子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/7074

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

オピニオン

私の視点

この頃多くの先輩たちが女性を取り巻く世界の現状を目にしたら、誇りと失望が交錯するに違いありません。

20世紀に女性の法的な権利や資格は飛躍的に拡大しました。100年前、女性に選挙権を認めていたのは世界でわずか2カ国でした。現在は世界中で認められ、どの大陸でも女性が国の

UNウィメン事務局
チリ前大統

われた平等への望みの実現にはほど遠いのが現状です。成人の非識字人口の約3分の2は女性で、妊娠や出産の合併症で90秒ごとに1人の女性が命を落としています。同じ労働における女性の賃金は男性よりも低く、多くの国で女性は土地の所有権や相続権で不平等な扱いを受けています。議会で女性の占める割

その目的は国連のシステム全体を活性化して、男女の同権という国連憲章のもとでの職務遂行を可能にすることです。

これは私が人生を通して成し遂げようとしてきたことです。母親であり、小児科医として仕事と家庭を両立させる苦労を経験し、保育所の不足で女性が職につけない事実を目の当たりに

ンスさえ与えられたなら、女性は社会や家族のために目標を達成できるということを、この目で見てきました。女性の強さ、勤勉さ、知恵は、人類の最も貴重な資源であるにもかかわらず未開発にとどまっています。この可能性の活用のために、さらに100年待っているべきではありません。

権と歳出削減の規模などをめぐって対立し、「ねじれ」状況にあった下院で暫定予算案が通らず、政府職員の給料を払えなくなるなど大混乱を招いた。国民はギングリッチ氏の行動を無責任と受けとめ、それが大きな要因の一つとなって共和党批判が広がり、96年秋のクリントン大統領再選につながった。

米コロンビア大教授

胃ろう造設

家族にガイドライン必要

野田 有美子（のだ ゆみこ）
聖路加看護大助教

最近、「私の視点」や「声」欄で胃ろうについてのさまざまな主張が取り上げられている。

1月25日の「声」（東京版）は、「胃ろうをつくるかどうかは本人の意思を最優先すべきであり、そのためには正しい情報と考える時間が必要」との主張だった。私も胃ろう造設の是非は可能な限り本人の意思を尊重するべきだと考える。

しかし、患者が認知症などで意思決定できない場合も多い。そんな場合には、本人に代わって意思決定をする家族への支援が重要だ。

カナダの「オタワ健康調査研究所」では、胃ろうをつくるか否か、高齢者に代わって意思決定をする家族や友人のためのガイドラインを考案し、インターネット上に公開している。

そこでは胃ろう造設のメリットとして、患者がより多くの栄養をとれるようになり、再び口から食べられるまで回復する可能性があることを挙げ、デメリットとして、胃ろうをつくることで出血などの合併症が生じるなどのリスクを挙げている。

さらに、患者の代理で家族や友人が意思決定する際には、以下のような基準を示している。

①事前指示書や患者が代理人と話し合ったことなど、これまでに患者が示した意思を考慮すること。患者の意思は、代理人が同意できなくても尊重されるべきものである。

②代理人が知る範囲で、患者がいまの状況におかれたときに栄養チューブを留置することを選択すると思うか、しないと思うか、に基づき判断する。

③これまでに患者の意思表示がなく、患者が望むと思われることが判断できない場合、延命効果だけではなく、予想される患者の生活の質も考慮して、患者にとっての最善の利益となるよう判断する。

胃ろう造設を検討する患者の家族が、このガイドラインを実際に利用した結果、意思決定の際の葛藤が減り、詳しい情報と個人的な価値観に基づく意思決定が促された、との研究結果が示されている。日本では、胃ろうそのものについて紹介するパンフレットなどはあるが、患者や家族の意思決定を支援するツールは見たことがない。

私は現在、カナダのガイドラインを日本版として改良する作業に取り組んでいる。具体的には、難解な医療用語を避けて患者や家族が読んで分かりやすい言葉を用い、胃ろう造設後の患者生存率のデータを日本人を対象とした研究から導き出されたものへと変更する。

さらに、胃ろう造設後の患者の生存率だけではなく、生活の質に焦点を当てた研究結果も紹介し、胃ろう造設をしない場合に提供されるケアを日本の実情に合わせて示すことも検討している。

日本向けのガイドラインが完成すれば、胃ろうについて、家族がより多くの情報に基づき、より納得のいく判断ができるようになると考える。また、医療現場での反響をフィードバックさせれば、さらに実用性の高いガイドラインへと発展させることも期待できるだろう。

大相撲改革

窪田 修（くぼた おさむ）
奈良県副知事

大相撲が八百長問題に揺れている。全容の解明が進められているが、うみを出し切るのは困難であろう。名前の挙がっている力士を処分できても、八百長のうわさは以前からあり、過去の問題を万人の納得が得られる形で決着することは難しい。また、力士が八百長に手を染めた動機として、十両と幕下の待遇差が注目されているが、優勝に関わる場面など、他の可能性もなくはない。

将来に向かって八百長と決別することは簡単ではない。外部理事を大幅に登用し、力士の育成を部屋任せにせず、協会の管理を強化するほか、親方株にメ